

# アンコンシャス・バイアスとの向き合い方について考える 授業の開発

## —マイノリティに関する問題を題材として—

佐伯 虹花

千葉大学教育学部学生

近年、日本におけるアンコンシャス・バイアスの存在が問題視されてきている。一部の企業や学校では、アンコンシャス・バイアスへに関する研修や授業が行われているが、改善できる点もあると考えられる。本実践では、より多くの受講生が社会問題との関連に気が付き、今後もアンコンシャス・バイアスと向き合う意欲を持つことができるようにするため、マイノリティに関する社会問題を題材として、アンコンシャス・バイアスについて取り上げる授業の開発・実践を行った。授業記録やアンケート結果より、マイノリティに関する社会問題を題材としてアンコンシャス・バイアスについて考えることで、自分の言動と社会問題とのつながりを意識することができ、今後もアンコンシャス・バイアスについて考えていこうという意欲がみられた。今後は、より多様な生徒を対象にした場合、どのような形態や内容が適切であるのかを検討する必要がある。

キーワード：アンコンシャス・バイアス、マイクロアグレッション、マイノリティ、授業実践、授業開発

### 1. 問題の所在

#### 1.1. 日本におけるアンコンシャス・バイアスの現状

アンコンシャス・バイアスとは、内海 (2018) によると、「過去の経験や習慣、環境から生じる自分自身が気づかず  
に持つ偏った見方・考え方」<sup>1</sup>とされている。

日本におけるアンコンシャス・バイアスについて、内閣府男女共同参画局が令和 3 (2021) 年度に「性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) に関する調査研究」<sup>2</sup>を初めて実施した。この調査によって、男女ともに性別役割意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) が強く存在していること等が明らかになっている。

また、西川 (2021) は、同調査に対して、「日本社会における男女の性別役割意識が変わらないアンコンシャス・バイアスの存在を明らかに指摘することができた。」<sup>3</sup>と述べている。さらに、西川 (2021) は、日本におけるジェンダーギャップの改善が進まない要因の一つとして、アンコンシャス・バイアスの存在を挙げている<sup>4</sup>。

このような性別役割意識に関わる現状について、ジェンダーギャップ指数をもとに見ていく。ジェンダーギャップ指数とは、経済・政治・教育・健康の 4 つの分野のデータ

から作成される指標であり、0 が完全不平等、1 が完全平等を示している。世界経済フォーラムが 1 年に 1 度発表しており、ここでは、2021 年 3 月に発表された『Global Gender Gap Report 2021』<sup>5</sup>のデータについて見ていく。

表 1 ジェンダーギャップ指数の上位国及び主な国の順位<sup>6</sup>

順位	国名	値	前年値	順位変動
1	アイスランド	0.892	0.876	
2	フィンランド	0.861	0.832	1
3	ノルウェー	0.849	0.842	-1
4	ニュージーランド	0.840	0.799	2
5	スウェーデン	0.823	0.820	-1
11	ドイツ	0.796	0.786	-1
16	フランス	0.784	0.781	-1
23	イギリス	0.775	0.767	-2
24	カナダ	0.772	0.771	-5
30	米 国	0.763	0.724	23
63	イタリア	0.721	0.707	13
119	アンゴラ	0.657	0.661	-1
120	日 本	0.656	0.653	1
121	シエラレオネ	0.655	0.667	-10
156	アフガニスタン	0.444	-	-

『Global Gender Gap Report 2021』では、全 156 か国の指数が報告されており、総合スコアのランキングで日本

Nichika SAEKI: Development of a Teaching Program for Junior High School Students to Think about how to deal with Unconscious Bias - Focus on Minority Issues  
Student, Faculty of Education, Chiba University

は120位に位置している。表1にあるように、G7の国々と比較して見ても日本のスコアが低いことは明確であり、日本におけるジェンダーギャップは改善すべき問題の一つであることが窺える。

以上の結果を受けて、内閣府男女共同参画局は、男女共同参画の取り組みを加速するための「女性版骨太の方針2022」<sup>7</sup>を政府決定した。この中で、新たに取り組むことを決定した事項Ⅰの「女性の経済的自立」に関連した具体策3として、「固定的な性別役割分担意識・無意識の思い込みの解消」を掲げている。

以上のことから、日本におけるアンコンシャス・バイアスは大きな問題であり、遞減に向けた取り組みが必要であることがわかる。

## 1.2. アンコンシャス・バイアスへの取り組み

アンコンシャス・バイアスに対する取り組みにはどのようなものがあるのだろうか。ここでは、受講対象や実施形態を問わず、アンコンシャス・バイアスに関連して行われている代表的な取り組みについて取り上げる。

### 1.2.1. 企業や組織における取り組み

まず、企業や組織におけるアンコンシャス・バイアスに関する取り組みを取り上げる。パク（2021）<sup>8</sup>によれば、Googleがアンコンシャス・バイアス研修を導入したことが、企業や組織によるアンコンシャス・バイアスへの取り組みを加速させたということである。Googleの社員研修<sup>9</sup>では、テスト等のワークや多様な事例の紹介の部分において、受講者の反応が良い様子が見取れる。受講者が共感できる部分を多く設けて、終始わかりやすい構成にすることが、アンコンシャス・バイアスについての実践では有効な手段の一つであると考えられる。

また、研修・講座の機能について、神谷（2022）<sup>10</sup>は、内容を正確に認識するためではなく、考え始めるきっかけとして有効であると述べている。より早期にこのきっかけがあれば、アンコンシャス・バイアスの現状の改善につながると考えられる。

### 1.2.2. アンコンシャスバイアス研究所<sup>11</sup>による実践

前節で取り上げたGoogleの社員研修は大人向けの取り組みであったため、ここでは、子どもを対象にした取り組みとして、アンコンシャスバイアス研究所による授業実践<sup>12</sup>を取り上げる。

アンコンシャスバイアス研究所のウェブサイトに掲載されている写真や記事から、ステレオタイプ<sup>13</sup>による思い込みが差別やいじめにつながってしまうことだけでなく、自分自身への思い込みが将来の可能性を狭めてしまっていること等、受講した児童生徒が広いアンコンシャス・バイアスを目を向けることができる実践が行われているこ

とがわかる。また、ある小学校の教師からの、「私のクラスでは、SDGsについて学ぼうとしていたのですが、アンコンシャスバイアスと、SDGsの「5. ジェンダー平等」「10. 不平等を無くす」「16. 平和と公正」「17. パートナースhip」とが、非常に関連しているということに気づいている子どもたちが何人か出てきました。そう考えると、アンコンシャスバイアスを学ぶことは、SDGsにつながる素晴らしい学びにあるということを改めて感じています。」<sup>14</sup>というコメントが紹介されている。この気づきが生まれると、より具体的な問題に即した行動を考えることができるため、今後もアンコンシャス・バイアスの改善に向き合っていく意欲にもつながると考えられる。アンコンシャスバイアス研究所の授業報告内では具体的な社会問題の事例を取り上げている様子が確認できないことや、このクラスでは事前にSDGsに触れていたと読み取ることができるところから、事前に持っている知識や状況によって、アンコンシャス・バイアスを学ぶ機会の中で生まれる生徒の気づきは変わると考えられる。

以上のことから、アンコンシャス・バイアスについての理解に加えて、具体的な社会問題との関連を授業で取り扱うことにも効果があるのではないかと考えられる。

### 1.2.3. 田代ら（2014）による授業実践

次に、田代ら（2014）<sup>15</sup>による授業実践を取り上げる。内海（2017）がアンコンシャス・バイアスについて、「違う言葉で同じような問題を取り上げていた」<sup>16</sup>と述べているように、アンコンシャス・バイアスという言葉が使われていなくても、同じような問題意識を持った実践は今までも行われていると考えられる。ここでは、学習者が自覚のなかったバイアスを目を向けているものとして、田代ら（2014）による実践を挙げる。

「ジェンダー・バイアスを問い直す授業—「男らしさ？女らしさ？」」では、男らしさ、女らしさという枠組みは社会的につくられたものであり、その中には誤解や偏見が含まれていることに気が付くこと、自他が社会的につくられた男らしさ、女らしさにくくり切れない多様な要素を持った存在であることに気が付き、らしさにとらわれない生き方を尊重しようとする態度を養うことを目的として、中学1年生を対象に行われている。この実践では、生徒の認識をもとに進めていく授業構成となっているため、授業者のバイアスによる影響が少ない授業となっている。また、らしさと言われているものが実際の自分たちの状況と異なっていることが目で見てわかることが、無意識に定着しているらしさであることの認識につながっている。

また、授業の終盤、授業者が3万人という文字を提示し、「何を示す数字？」と問いかけた際に、一部の男子生徒が「オカマ」「ニューハーフ」という発言をしていた。生徒がこれらの言葉を差別用語であると認識していないこと

が表面化している場面であるが、授業者がそれらの言動は人権侵害であると指摘をするのみで授業が終わってしまっていた。授業者の反省にも、十分な時間をとることができなかつたとあるように、自分たちにとっては何気ない言動が、ある人にとっては傷つく言動である場合があることを考える時間や機会を設けることで、このような誰かが傷つく可能性のある発言の防止につながると考えられる。

### 1.3. アンコンシャス・バイアスに関する授業の留意点

以上の先行実践を踏まえて、本論では、社会問題とアンコンシャス・バイアスとの関連を内容として扱った授業を、中学生を対象に行う。また、身近にあるアンコンシャス・バイアスに目を向ける場面では、マイクロアグレッション<sup>17</sup>についても扱うことで、安易な発言は差別的行動につながる可能性があることに気が付くことができ、先行実践から挙げた留意点が解決できるのではないかと考えられる。さらに、生徒同士のワークや多様な事例を取り入れる等、生徒にとってわかりやすい内容にすることにも留意して、授業開発を行っていく。

## 2. 研究の目的と方法

### 2.1. 研究の目的

本研究の目的は、マイノリティに関する問題を題材として、アンコンシャス・バイアスとの向き合い方について考える、中学生向けの授業を開発し、中学 2 年生を対象に実践し、その考察を行うことで本授業の有効性と課題を明らかにすることである。特に以下の 2 点を中心に有効性と課題を明らかにしたい。

1 つ目は、マイノリティに関する問題を事例として扱った授業が、アンコンシャス・バイアスとの向き合い方を考える機会として妥当かどうかである。本授業では、マイノリティに関する問題に関連させてアンコンシャス・バイアスを取り上げるため、身近なアンコンシャス・バイアスに目を向けにくい可能性がある。そこで、本授業が、身の回りアンコンシャス・バイアスへ気が付くことに加えて、今後もアンコンシャス・バイアスに向き合っていこうとする態度を養うことができる機会となるのかどうかを検討していく。

2 つ目は、開発した授業の内容が中学 2 年生に適しているかどうかである。本授業における教材では、マイノリティに関する問題の事例として東京都青年の家事件や川崎バス闘争を題材として扱うが、中学 2 年生にとって少し離れた年代の事例であるため、身近に感じる事が難しいと予想される。この中で開発した教材が適切であるのかどうかを検討していく。

### 2.2. 研究の方法

本研究では、マイノリティに関する問題とアンコンシャス・バイアスとのつながりについて学び、アンコンシャス・バイアスへの向き合い方を考える中学生向けの授業を開発し、実践する。授業中における生徒の様子や発言、生徒の事前・事後アンケートの回答をもとに授業の考察を行い、本授業の有効性と課題について明らかにしたい。

授業の概要は以下の通りである。

実践校	千葉大学教育学部附属中学校
教科	社会科 (選択教科)
対象	中学 2 年生 5 名
時間	50 分×2 時間 (13:10~14:00)
実施日時	1 時間目 令和 4 年 10 月 25 日 (火) 2 時間目 令和 4 年 11 月 1 日 (火)
授業者	郡司日奈乃 <sup>18</sup>

## 3. 授業の開発

### 3.1. 授業で取り扱う内容について

今回の授業では、社会的少数者が行動を起こした事例を題材として扱い、それらの事例が十分な解決に至らない原因の一つとしてアンコンシャス・バイアスを取り上げる。その後、事例との関連を踏まえて、生徒が自分なりのアンコンシャス・バイアスとの向き合い方を考えていく授業とした。

このような構成にした理由は、日常や社会に潜むアンコンシャス・バイアスについて、授業後もさらに意欲を持って考えることができるようにするためである。1.2.1 で述べたように、アンコンシャス・バイアスについての授業は目を向けるきっかけとして有効なものであるため、授業後も意識し続けることでより多くのアンコンシャス・バイアスに気が付いたり、行動につなげたりすることができる。しかし、先行実践では、今後も新たなアンコンシャス・バイアスに気が付こうとする意識が持てているかどうかについては明らかになっていない。そこで、本授業では、身近な会話の中にあるアンコンシャス・バイアスに加えて、社会問題との関連についても扱うことで、広い視野でアンコンシャス・バイアスを捉えることができるようにする。日常生活や他の科目の授業でも触れることのある社会問題を題材とすることで、生活の中でアンコンシャス・バイアスを意識する場面を増やすことができれば、今後もアンコンシャス・バイアスに向き合っていく意識を持ち続けることができるのではないかと考え、設定した。

### 3.2. 事例の選定

社会的少数者に関する問題は、女性、高齢者、子ども、外国人等と様々であるが、今回は生徒の関心が高いと予想できる性的指向と障害者の問題について扱う。

まず、性的指向に関する問題については、女子制服のストラックス導入が近年大幅に増加していたり、3年ぶりに東京レインボープライド<sup>19</sup>のプライドパレードが開催されたりと、社会で盛り上がりを見せている話題の一つである。その中でも同性愛については、現在、札幌、東京、名古屋、大阪、福岡の裁判所において「結婚の自由をすべての人に」訴訟<sup>20</sup>が行われていて、地裁の判決が出るごとに大きく取り上げられ、社会的に関心が高い話題であり、生徒にとっても一度は見聞きした経験があると考えられる。さらに、東京都青年の家事件は、初めて公に同性愛について定義されるきっかけになった重要な事例であるため、授業で取り上げるものとして選定した。

次に、障害者に関する問題については、学校の授業でバリアフリーやユニバーサルデザインについて学んだり、パラリンピック等で社会的に大きな話題になる機会が多かったりと、生徒にとっても日ごろから問題意識を持っているものの一つであると考えられる。その中でも川崎バス闘争は、生徒にとっても身近であるバスの乗車に関する問題であり、状況が理解しやすいと考えられる。また、現在も各地で乗車拒否問題が起こっており、規則の改正があったにもかかわらず十分に解決されていない問題の代表例と捉えることもできると考えたため、授業で取り上げる事例として選定した。

### 3.3. 授業内資料の作成

本節では、生徒に提示した資料について述べる。本授業では、以下のものを用意した。

- ① 1時間目事例資料 A 班（東京都青年の家事件）
- ② 1時間目事例資料 B 班（川崎バス闘争）
- ③ 2時間目場面資料

①は、東京都青年の家事件についての概要を載せた資料である。この資料には、OCCUR が最初に府中青年の家に宿泊した際に、他団体から嫌がらせを受けたところから、東京都を提訴するまでの一連の流れを 1 枚のプリントにまとめてある。生徒はこの資料を読んで概要を理解したうえで、ワークシートの問いに答える形で判決を見ていく。判例を読む時間を十分に確保することで、団体のメンバーの嫌がらせだけでなく、東京都という公的な組織の認識にも大きな問題があったことに気が付いてほしいと考えたため、このような概要を把握する資料を作成した。また、この事例を理解するために必要となる裁判の仕組みについては、中学校 3 年生の社会科公民分野で学習する。今回は中学校 2 年生での実践であったため、裏面に補足②として、日本弁護士連合会の子どもページ<sup>21</sup>にある、裁判の流れが図になっているものを載せている。また、表の概要には、アンコンシャス・バイアスが現れている OCCUR が初

めに受けた嫌がらせの内容や、東京都側の認識の問題が大きなものであることを理解するために有効な提訴後の裁判の流れをそれぞれ補足①、補足③として裏面に載せている。

②は、川崎バス闘争についての概要をまとめた資料である。この資料には、バス会社によって車いす利用者に対して厳しい乗車条件を示す規則が制定されたところから、川崎駅前で大きな闘争が起こったところまでの一連の流れを一枚のプリントにまとめてある。また、規則の変化を調べる際の参考として、キーワードと国土交通省の告示・通達一覧が一覧になっているウェブページの URL を掲載している。生徒はこれを読んで概要を理解したうえで、キーワード等を参考に、発端となった規則は闘争によって変化したのかどうか、現状はどのようになっているのかを調べる活動を行っていく。A 班と同様に、調べる時間を十分に確保することで、規則が改正されたことだけでなく、闘争から改正されるまで時間がかかっていること、改正されたにもかかわらず同じような問題が現在も起こり続けていることに気が付いてほしいと考えたため、このような概要を把握する資料を作成した。

③は、アンコンシャス・バイアスが言動に現れている場面を会話文で表現した資料である。男女に関すること、外国人に関すること、高齢者に関するものがそれぞれ 1 場面ずつ、性的指向に関するものが 2 場面の、計 5 場面を設定した。

1 つ目は、男女に関することとして、「男子は数学が得意である」「女子は理系には向いていない」というバイアスがある会話の場面である。2 つ目は、外国人に関することとして、「純日本人に見えない人は、日本語が苦手である」「ブラジル人はサッカーが上手」というバイアスがある会話の場面である。3 つ目は、高齢者に関することとして、「高齢者は耳が遠いから、大きな声でゆっくり話さないといけない」というバイアスがある会話の場面である。また、4 つ目と 5 つ目は性的指向に関することとして、「好きな人・結婚、と言えは異性である」というバイアスがある会話の場面である。

4 つ目については、中学生が恋愛の話をしている場面を設定している。会話の中に出てくる「彼氏」「好きな人」等の言葉を検討するだけでなく、会話をしている中学生の性別が明記されていない点に気が付き、議論を粉うことができれば、より日常の場面に即した思考ができるのではないかと考えた。また、この資料の作成にあたっては、生徒が想像しやすい場面かつ多様な問題について扱うことができるように注意した。

### 3.4. 授業の活動とねらい

本研究で開発した授業のねらいは、大きく 2 つに分けることができる。

1つ目は、社会的少数者が行動を起こした事例との関連を通して、アンコンシャス・バイアスについて理解することである。社会問題が解決に至らない原因の一つとしてアンコンシャス・バイアスを取り上げることで、日常会話に潜んでいるものという認識に加え、問題意識を持って認識することで、継続的に向き合い方を考えていこうという意欲につなげることを目標としている。

2つ目は、アンコンシャス・バイアスに関する多様な事例や考え方に触れたうえで、社会問題やアンコンシャス・バイアスに対する自分なりの関わり方を考えることである。多様な事例や考え方を授業内容として扱うことで、社会問題やアンコンシャス・バイアスへの関わり方は多様であることを理解し、それを踏まえて改めて個人で考えることで、現時点での自分の考え方に合う意見を持つことを目標としている。

### 3.5. 授業の概要

本授業は、千葉大学教育学部附属中学校の選択教科である選択社会科にて実施した。選択教科は週 1 時間設けられており、生徒は複数ある講座の中から一つの講座を選択し、受講することになっている。筆者が所属する研究室のメンバー数名と共同で授業を担当し、「「少数者が生きやすい社会」とは？—対話とシミュレーション・ゲームで学ぶ—」という講座名で 2022 年度後期選択教科を開講した。本講座は、さまざまな人との対話を通して社会にある問題について掘り下げたり、シミュレーションを通して歴史の捉え方について考えたりすることで社会や歴史を捉える視点の多様性に気づき、それを踏まえて社会的・歴史的事象に対する自分なりの捉え方や向き合い方を考えることを目的としている。

本研究における実践は、本講座の第 1 回及び第 2 回で実施した。なお、講座名と統一させるため、授業について述べる部分では、マイノリティを社会的少数者と言い換えている。

授業の概要は表 2、表 3 の通りである。

表 2 授業の概要 (1 時間目)

時間	学習内容
5 分	事前アンケートに回答する。
7 分	言葉の認識を共有する。
5 分	少数者をめぐる問題の現状を認識する。
20 分	事例についての調べ学習を行う。
10 分	調べたことや考えたことを全体で共有する。
3 分	本時の感想を書く。

表 3 授業の概要 (2 時間目)

時間	学習内容
8 分	前回の学習内容を振り返る。
5 分	アンコンシャス・バイアスについて理解する。
5 分	マイクロアグレッションについて理解する。
15 分	日常に潜むアンコンシャス・バイアスを見つけ出す活動を行う。
7 分	全体で共有する。
5 分	アンコンシャス・バイアスにどのように対応していくか、自分の考えを書く。
5 分	全体で考えを共有する。
3 分	改めて、社会問題にどのように関わっていくかについても含め、自分の考えをまとめる。
2 分	事後アンケートに回答する。

## 4. 授業の実際と考察

### 4.1. 授業の実際

本節では、アンケートから読み取れる生徒の実態および各授業の考察を記述する。

#### 4.1.1. 事前アンケートからわかる生徒の実態

1 時間目冒頭において、事前アンケートを行った。アンケートの結果より、社会にある問題に対して関心があると回答していること、記述式の回答にて LGBTQ+ や車いすに関する事例を挙げていることから、受講した 5 名の生徒は、社会にある問題に対する関心を持っており、社会的少数者に関しては、性的マイノリティの問題や障害のある人に関する問題について特に関心があると考えられる。一方で、家族や友人と社会にある問題について話す機会や自分の知識と社会問題が関連している認識があまりない状態であったため、新しく知識や気づきを与えるという授業ではなく、既に生徒の中にある知識や経験等を引き出し、社会問題と関わっていることを認識させることで、関心を高める活動が有効であると考えられる。

#### 4.1.2. 1 時間目の授業の実際

1 時間目の目的は、社会的少数者が行動を起こした事例について調べ学習を行い、規則の内容や解釈の見直しが行われている一方で、十分な解決には至っていないことに気が付くことであった。

授業冒頭では、この授業の講座名に含まれている「少数者」「生きやすい社会」という言葉についての認識を共有した。さらに、最近起こった事例や法務省の人権課題一覧のウェブサイトを見て、日本の社会的少数者をめぐる問題の現状を全体で認識した。

次に、共通認識したことを踏まえて、性的指向に関する問題 (A 班)、障害者に関する問題 (B 班) の 2 つに分かれて調べ学習を行った。筆者が用意した事例についての概

要資料（図1）を読み込み、ワークシート（図2）の問いに答える形で活動を進めた。各班で調べたことや考えたことを共有したのち、次の時間に向けて、十分な解決に至っているかどうかについて全体で考えた。

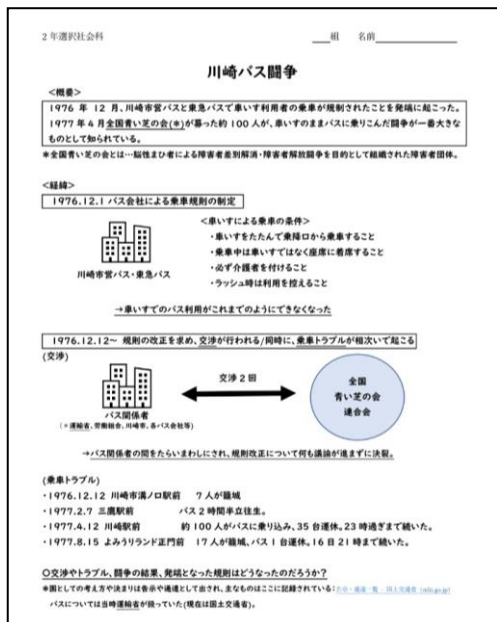


図1 事例の概要をまとめた自作資料（B班）

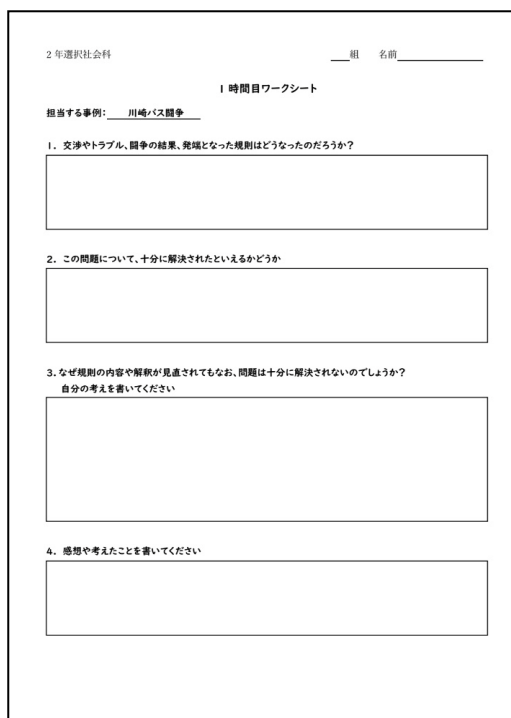


図2 ワークシート（B班）

今回の授業は生徒自身が選択して受講する形のものであり、受講人数も少ないため、生徒一人ひとりの関心や認識を授業者だけでなく生徒同士で把握することが必要で

あると考え、冒頭の講座名について考える活動を行った。どちらの言葉に対しても、各生徒が何かしらの単語やキーワードを浮かべたり、経験や知識と関連させたりしながら、自分の言葉で発言することができていた。特にLGBTQ+や障害のある人についての発言が多かったことから、本授業を受けている生徒たちは、社会的少数者に関する問題の中でもこれらの問題についての関心を持っていると考えられる。

また、調べ学習の場面では、どちらの班についても集中して活動を進めている様子であった。全体で意見を共有する場面からも、班員全員が事例について理解をしていることや、差別的言動が必ずしも悪意によるものではないことに気が付くことができていた。

しかし、円滑に調べる活動が進められていない様子も一部見られた。図1図2の資料を用いて活動していたB班では、規則の変化を調べる段階に必要なキーワードのコツを伝えられていなかったり、A班では問いの言葉が分かりづらかったりと、筆者が作成した資料の情報が洗練不足が原因として考えられるため、教材における情報や発問の再検討が必要であると考えられる。

また、事例を理解する活動において、今回の実践で行った問いに答えていく方法が適切であるかどうかについても、検討の余地があると考えられる。

#### 4.1.3. 2時間目の授業の実際

2時間目の目的は、アンコンシャス・バイアスとはどのようなものか理解し、今後の向き合い方について、自分とは異なる意見も踏まえたうえで、自分なりの考えを持つことであった。

授業冒頭では、前時で調べた事例について概要を振り返った後、授業後に書いてもらった感想をまとめたものを全体に共有した。生徒のコメントに共通する部分に関連させて、アンコンシャス・バイアスやマイクロアグレッションについて知る活動に移った。スライド（図3）に挙げられている例をもとに、授業者が生徒の考えを聞いたり、具体的なエピソードを紹介したりと話す活動を中心に進めた。

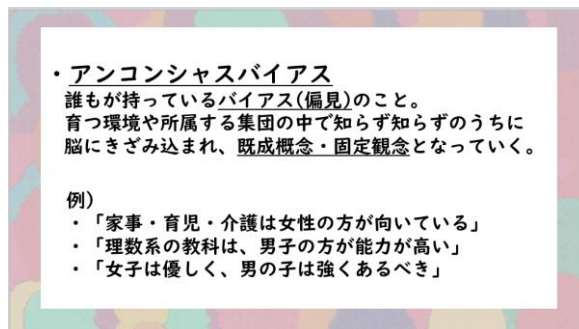


図3 スライド画面

前時の授業後に集めた感想にあった「普通」「当たり前」「固定観念」等の言葉には、アンコンシャス・バイアスの捉え方と通ずるものがあると感じたため、導入として取り上げた。アンコンシャス・バイアスやマイクロアグレッションについて理解する場面では、スライドにある例について話したり、自分の経験に基づくエピソードと関連させて話したりと、生活に近い具体例を複数挙げることで、言葉の意味だけではなく、どのようなものであるかの理解につながっている様子であった。また、授業内で自分の中にあるアンコンシャス・バイアスに気が付いた生徒が、自分のバイアスを隠そうとするのではなく、クラス内で共有して向き合っている場面があった。

理解したことを踏まえて、筆者が用意した場面例からアンコンシャス・バイアスを見つけ出す活動では、一つひとつの言葉を丁寧に検討しながら考えている様子が見られた。性別の表記がない場面例についても、全体で議論をしている様子から、各生徒が自分なりに根拠を持って性別の判断をすることができていた。その後の対応を考える場面では、活動内で考えたことをもとに、自分なりの意見を考えることができていた。

場面資料からアンコンシャス・バイアスが現れている言動を見つけ出し、どのようなバイアスがあるかを考える活動では、バイアスではなく言動をそのまま書き抜いている生徒がいる等、筆者の意図していない部分で場面を想定することに時間がかかる様子が見られた。記録の仕方については、ワークシートの発問の言葉を精練することで改善されると考えられる。場面の想定については、丁寧に言葉を検討することで、自分の持つイメージに影響されず、情報からわかることから状況を読み取る機会となっていたため、意図的に曖昧な場面例を設けることで、多様な議論の可能性が生まれると考えられる。

#### 4.2. 授業実践の考察

授業全体を通して、積極的に活動に取り組んでいる様子が確認できた。特に場面資料からアンコンシャス・バイアスを読み取る活動においては、筆者の想定以上に会話文にある言葉を丁寧に検討していた。しかし、事例について理解する場面に時間がかかってしまい、生徒同士で意見を共有しながら活動したり、考えを伝え合ったりする時間を設けることができなかつたため、資料の精練や活動の設定、時間配分の調整・検討が今後の課題として残ると考えられる。

#### 4.3. アンケートの考察

1 時間目冒頭と 2 時間目終盤にアンケートを行った。ここでは、事前・事後アンケート両方に設けた項目について、結果を比較し、考察する。アンケート集計結果を以下にまとめる (表 4)。選択肢の①は「とてもあてはまる」、②は

「どちらかというとはまる」、③は「どちらかというとはまらない」、④は「全くあてはまらない」である。なお、2 時間目に欠席者が 1 名いたため、事後アンケートの回答数は 4 となっている。

表 4 事前アンケート集計結果 (N=5)

アンケート項目	①	②	③	④
社会には解決すべき問題がたくさんあると思う。	3	2	0	0
社会問題を解決することに関わってみたいと思う。	1	4	0	0
偏見や差別のない社会にしたいと思う。	3	2	0	0
偏見や差別などの社会問題に目を向けていきたいと思う。	1	4	0	0
自分の身の回りに偏見や差別で困っている人はいないと思う。	1	0	3	1
自分は偏見や思い込みを持っていないと思う。	0	1	3	1

表 5 事後アンケート集計結果 (n=4)

アンケート項目	③	②	③	④
社会には解決すべき問題がたくさんあると思う。	4	0	0	0
社会問題を解決することに関わってみたいと思う。	2	2	0	0
偏見や差別のない社会にしたいと思う。	3	1	0	0
偏見や差別などの社会問題に目を向けていきたいと思う。	3	1	0	0
自分の身の回りに偏見や差別で困っている人はいないと思う。	0	2	0	2
自分は偏見や思い込みを持っていないと思う。	0	0	2	2

表 4 と表 5 を比較すると、授業前後で回答に変化があることがわかる。

まず、「社会には解決すべき問題がたくさんあると思う。」という設問については、すべての生徒が社会には解決すべき問題がたくさんあると思っていることがわかる。また、事後アンケートで回答を 2 から 1 に変更した生徒は、授業内のワークシートやアンケートにて「知らない社会問題



がたくさんあった。」「偏見や差別をなくすことは、知ることから始まると思う。」と述べていることから、授業内で未だ十分に解決されていない社会問題や事例を複数取り上げ、アンコンシャス・バイアスについて学んだことで、社会には自分の知らない事例が多くあることや、自分の行動が解決につながることを考えることができたのではないかと考えられる。

「社会に問題を解決することに関わってみたいと思う。」という設問の回答からは、どの生徒も社会問題の解決に関わりたいという意識を持っていることがわかる。また、事後アンケートでは1人の生徒が回答を2から1へ変更している。この生徒のワークシートでは、自分の思い込みや思い込みが現れている言動についての記述が多くみられたため、授業を通して身近な言動が社会問題につながっていると意識したことが、解決への意欲につながったのではないかと考えられる。

「偏見や差別のない社会にしたいと思う。」「偏見や差別などの社会問題に目を向けていきたいと思う。」という設問の回答からは、どの生徒もこのような思いを持っていることがわかる。授業前から偏見や差別のない社会にしたいと思っていた生徒が、本授業を通して、社会問題について知ることが、問題の解決や自分の行動の改善につながることを感じたことによって、偏見や差別等の社会問題への意欲を高めることができたと考えられる。

「自分の身の回りに偏見や差別で困っている人はいないと思う。」「自分は偏見や思い込みを持っていないと思う。」という設問の回答では、事後アンケートで半数の生徒が回答を変更している。本授業を通して、自分の身の回りにも偏見や差別で困っている人がいるかもしれない、自分にも偏見や思い込みがあるかもしれない、という、現在は認識していないことでもあらゆる可能性を想定した考え方をすることができていると捉えることができる。

## 5. 研究の成果と今後の展望

### 5.1. 研究の成果と課題

本研究では、アンコンシャス・バイアスについての授業において、マイノリティに関する問題を題材として取り上げ、アンコンシャス・バイアスとの向き合い方について考える授業を実践し、その有効性と課題を明らかにした。研究の目的で述べた2つの観点に対応する形で成果と課題を述べる。

まず、マイノリティに関する問題を事例として扱った授業が、アンコンシャス・バイアスとの向き合い方を考える機会としての妥当であるかどうかについてである。ワークシートやアンケートの記述の中に、自分の言動が周囲へどのように影響するか、悪い影響を与えないためにはどうしたらよいかについて考えているものが複数あった。社会問

題との関連を踏まえてアンコンシャス・バイアスについて考えることによって、自分の言動と社会問題とのつながりが意識できることで、アンコンシャス・バイアスについて考える動機につながっていると考えられる。このことから、社会問題を事例として扱うことは、アンコンシャス・バイアスについて考える機会の一つとして有効であると考えられる。また、2.1で述べた身近なアンコンシャス・バイアスを目を向けにくくなってしまっているのではないかと、という懸念点についても、授業内での発言や各記述から、どの生徒も自分の記憶や経験にもとづいた発言をしており、日常生活と結び付けて理解していることを読み取ることができている。授業内で多様な事例を挙げ、さらにそれについて生徒同士の認識や考えを共有することで、この懸念点を払拭することができたと考えられる。

2つ目は、開発した授業が中学2年生に適しているかどうかについてである。内容は概ね適切であったといえるが、資料に載せる情報量や活動の設定等、教材や授業プランの作成において検討の余地があるといえる。

授業のどの場面においても授業者の問いに淀まずに反応していたり、個人でもスライドや資料を読み込んでいたり、積極的に活動に取り組むことができていた。また、少し手が止まる場面があったとしても、授業者による少しの言葉かけで活動を進めることができていたことから、内容の難易度は適切であったと考えることができる。

しかし、社会問題の事例について理解する活動やアンコンシャス・バイアスを見つけ出す活動では、資料やワークシートから何を調べるのかがすぐに伝わらず、活動が円滑に進まない場面があった。授業資料に載せる情報や活動に移る際の授業者の言葉等、教材の精練が必要であると考えられる。また、本実践は自ら本講座を選択した生徒5名を対象にしたものであり、事前アンケートや授業内の発言から、どの生徒も社会問題や差別偏見について関心が高いことがわかる。社会問題や差別偏見について関心が低い生徒や関心の高さにばらつきがある生徒に対してどのような教育効果があるのかについて、検討が必要であると考えられる。

### 5.2. 今後の展望

本節では、本研究の課題を踏まえ、今後の展望を3点述べる。

1点目は、本授業における授業及び教材の改善である。5.1で述べたように、教材や授業プランに課題が残っている。資料の情報を精練させたり、生徒に伝わるように発問や資料内の言葉を検討したりすることで、生徒の活動を活発にすることができると考えられる。さらに、活動がスムーズに進み、生徒同士話しながら活動する時間を十分に確保することができれば、より考えを深めることができると考えられる。



2 点目は、選択教科ではない授業としては、どのように展開できるのかについて検討する必要がある。本論における授業は選択教科にて展開されており、生徒が望んで講座を選択していたため、ほとんどの生徒が社会にある問題への関心が高く、活動へも積極的に参加していた。社会にある問題に対する関心があまりない生徒や差別偏見への問題意識が乏しい生徒に対してどのような教材が適切であるのか、生徒の実態に合わせた教材の改良や題材の選定を検討する必要がある。

3 点目は、関連研究や実践の更なる調査である。今回は 1.2.3. で取り上げた 3 つの実践を踏まえて、本論では、アンコンシャス・バイアスが原因としてある具体的な問題を取り上げることが、アンコンシャス・バイアスへ向き合っ

ていく意欲を持たせることにつながるのかを検討するべく、マイノリティに関する問題を題材とした授業を開発した。学校以外の場でのアンコンシャス・バイアス研修や、アンコンシャス・バイアスという言葉を用いていなくても似た考え方を扱っている授業実践についても意識して先行実践を調べたが、十分に調べることはできておらず、他にも関連する実践や事例は多くあると考えられる。実施形態や対象を問わず、似た考え方を扱っている授業についても更に調査したうえで、アンコンシャス・バイアスについて考える機会の在り方を探っていきたい。

<sup>1</sup> 内海 (2018)、p.96

<sup>2</sup> 内閣府男女共同参画局 (2021)

<sup>3</sup> 同上、p.101

<sup>4</sup> 西川 (2021)、pp.100-101

<sup>5</sup> Word Economic Forum (2021)「Global Gender Gap Report 2021」[https://www3.weforum.org/docs/WEF\\_GGGR\\_2021.pdf](https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2021.pdf) (2023 年 2 月 17 日最終確認)

<sup>6</sup> 同上、p.10 をもとに、筆者が国や項目を抽出して作成した。

<sup>7</sup> 内閣府男女共同参画局 (2022)、pp.1-5

<sup>8</sup> バク (2021)、p.22

<sup>9</sup> 「Unconscious Bias @ Work | Google Ventures」<https://youtu.be/nLjFTHtEVU> (2023 年 1 月 31 日最終確認)

<sup>10</sup> 神谷 (2022)、p.23

<sup>11</sup> 組織の正式名称として「アンコンシャス・バイアス」ではなく「アンコンシャスバイアス」と表記している。

<sup>12</sup> 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所「子どもたちへ」<https://www.unconsciousbias-lab.org/edu> (2023 年 1 月 31 日最終確認)

<sup>13</sup> ステレオタイプとは、守屋 (2022、p.26) によると、「人の属性や一部の特性をもとに先入観や固定観念で決めつけてしまう」ことである。

<sup>14</sup> 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所「子どもたちへ」<https://www.unconsciousbias-lab.org/edu> (2023 年 3 月 7 日最終確認)

<sup>15</sup> 田代ら (2014)、pp.91-98

<sup>16</sup> 内海 (2017)、p.23

<sup>17</sup> スー (2021、p.34) は、「ありふれた日常の中にある、ちょっとした言葉や行動や状況であり、意図の有無にかかわらず、特定の人や集団を標的とし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教を軽視したり侮辱したりするような、敵意ある否定的な表現のこと」と定義している。

<sup>18</sup> 千葉大学大学院教育学研究科修士課程の大学院生である。

<sup>19</sup> 特定非営利活動法人 東京レインボープライド <https://tokyorainbowpride.com/> (2023 年 1 月 31 日最終確認)

<sup>20</sup> 一般社団法人 Marriage For All Japan—結婚の自由をすべての人に— <https://www.marriageforall.jp/> (2023 年 1 月 31 日最終確認)

<sup>21</sup> 日本弁護士連合会 子どもページ 裁判ってなあに? <https://www.nichibenren.or.jp/ja/kids/saiban.html> (2023 年 1 月 31 日最終確認)

## 引用文献

内海房子 (2017)「第 65 回年次大会特別企画 1 シンポジウム

「男女共同参画推進への鍵～アンコンシャス・バイアスって何?～」、『工学教育』、第 65 巻第 6 号、pp.22-23

内海房子 (2018)「アンコンシャス・バイアスって何?」、『工学教育』、第 66 巻第 2 号、p.96

神谷悠一 (2022)『差別は思いやりでは解決しない ジェンダーや LGBTQ から考える』、集英社新書

スー、デラルド・ウィン (2021)『日常生活に埋め込まれたマイクログレッション 人種、ジェンダー、性的指向: マイノリティに向けられる無意識の差別』、株式会社明石書店

田代美江子・渡辺大輔・長香織 (2014)「ジェンダー・バイアスを問い直す授業づくり—「性の多様性」を前提とする中学校の性教育—」、『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、13 巻、pp.91-98

内閣府男女共同参画局 (2021)「令和 3 年度 性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) に関する調査研究」

[https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu\\_r03.html](https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu_r03.html) (2023 年 1 月 31 日最終確認)

内閣府男女共同参画局 (2022)「女性活躍・男女共同参画の重点方針 2022 (女性版骨太の方針 2022)」

[https://www.gender.go.jp/policy/sokushin/pdf/sokushin/jyuten2022\\_honbun.pdf](https://www.gender.go.jp/policy/sokushin/pdf/sokushin/jyuten2022_honbun.pdf) (2023 年 1 月 31 日最終確認)

西川学 (2021)、「アンコンシャス・バイアスへの気づき」、『人権を考える』、第 25 巻、関西外国語大学、pp.95-106

バク・スックチャ (2021)、『アンコンシャス・バイアス—無意識の偏見—とは何か』、株式会社 ICE

守屋智敬 (2022)、『「アンコンシャス・バイアス」マネジメント 最高のリーダーは自分を信じない』、株式会社かんき出版

## 謝辞

授業開発にあたり、様々な視点からご助言いただきました、研究室同期の 9 人や学部 3 年生、修士課程・博士課程のみなさま、研究室アドバイザーの根本先生、古谷先生、2021 年度・2022 年度の長期研修生の先生方、他にも多くのみなさまにお世話になりました。特に、授業の指導案・教材を見てくださった明石さん、実践をしてくださった郡司さんには大変お世話になりました。ありがとうございました。

そして、本講座を選択し、受講してくださった千葉大学教育学部附属中学校の生徒のみなさま、授業実践の場をご用意いただいた先生方のご協力なしには、本論文における授業実践は行うことができませんでした。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。